



Title	笠金村の印南野從駕歌
Author(s)	村山, 出
Citation	国語国文研究, 130, 1-12
Issue Date	2006-08-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93494
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_130-01-12.pdf



笠金村の印南野従駕歌

一 はじめに

万葉集と続紀によると、聖武天皇は即位直後の神亀年間に毎年行幸を実施しており、天武天皇系の始源の地である吉野離宮とともに副都難波宮は格別な意味をもっていたと思われる。神亀元年は三月に吉野離宮、一〇月に紀伊国、二年は五月に吉野離宮、一〇月に難波宮、そして、三年一〇月に播磨国印南野と難波宮に行幸するが、この折に笠金村と山部赤人が印南野従駕歌を作っている。二人の歌の表現上に新しい趣向が見られるが、小稿では特に金村の歌の意義について考えてみたい。

三年丙寅秋九月十五日に、播磨の国の印南野に幸す時に、笠朝臣金村の作る歌一首并せて短歌

名寸隅の 舟瀬ゆ見ゆる 淡路島 松帆の浦に 朝なぎに 玉藻刈りつつ 夕なぎに 藻塩焼きつつ 海人娘子 ありとは聞

村 山 出

けど 見に行かむ よしのなければ ますらをの 心はなしに
たわや女の 思ひたわみて た廻り 我はぞ恋ふる 舟楫をな
み (六九三五)

反歌二首

玉藻刈る海人娘子ども見に行かむ舟楫もがも波高くとも (六九三六)
行き廻り見とも飽かめや名寸隅の舟瀬の浜にしきる白波 (六九三七)

金村は長歌でまず此岸の「名寸隅の舟瀬」ごしに遙かに眺望される対岸の「淡路島」の「松帆の浦」を提示している。吉井巖氏が兩地名に「逢ふ」と「待つ」の含意を指摘されたのを祖述する梶川信行氏が言われるように、その言葉によるストーリーリーの展開も考えられるが、その前に天皇行幸の本義にもとづく国見の範圍の宏遠であることを示し、御食つ国淡路島をはじめとする領土確認の意義をも

つのであり、天皇の国見における視線に沿って場面を設定することに行幸讚美の意味が込められていることも確認したい。その上で両地名の含意を契機にその土地の「海人娘子」に対する「ますらを」の恋慕憧憬を描いている。御食つ国の生業に従う「海人娘子」の存在を耳にして見に行くための「舟楫」がなく、「我」は「ますらを」の理性を失うほど「たわや女」のように思いしおれ、恋い焦がれ逡巡するばかりと「海人娘子」への強い恋慕を表現し、第一反歌で長歌の主意を繰り返して、てだてがあれば「海人娘子」を見に行く熱望は波が高くてもやみがたいと、恋慕が並みのものでないことを強調している。そして、第二反歌で長歌冒頭の此岸「名寸隅の舟瀬」に視線を戻し、舟瀬の浜にしきりに寄せる白波の景を「見とも飽かめや」と賞し国土讚美のままとしたと考えられる。

それにしても長歌と第一反歌において対岸の「海人娘子」に対する「ますらを」の強い恋慕の表現に大きな特色を見せるために、吉井巖氏は「この変化は、供奉歌の歌われる場面の質的な変化に必ずるものではないか」と指摘されたが、この表現の趣向をいかに理解すべきかが問題であろう。この点を従来の代表的な説はどのように解して来たであろうか。

二 代表的諸説

清水克彦氏は、長歌と第一反歌における「我」の私的な願望について、海人娘子が松帆の浦の美景を構成する中心的景物としての意味を持ち、第二反歌の名寸隅の船瀬の浜の美景の賞美とともに全編

が景賞美の性格をもつことよって「この歌は危うく公的な行幸従駕歌に止まり得た」と説かれた。そして中心に海人娘子を配した特別な意味は、海人娘子に作者の相関的な私情が働いているが、行幸従駕歌に見られる私情は、当時の宮廷人一般が嗜好した共通の私情とでも呼ぶべきものであると説かれた。

村田正博氏は、金村が海人娘子への恋の焦燥を歌ったのは、土地にちなむ隠妻伝説を下地に置いたと見られた。金村は名寸隅の船瀬や淡路嶋の海人という現実の素材を隠妻（ナビツマ）伝説によって脚色し、二重映しにして歌ったにちがひなく、土地の伝説をとりあげて作歌することは、その土地の由緒を認め讚美することにつながる、と解された。

梶川信行氏は村田氏説を批判される立場から、行幸の目的地は「印南野」の明石郡の邑美頓宮で、イナミツマまで足をのばして、伊美頓宮（現在の明石市魚住町北部の丘陵地一帯）とイナミツマ（現在の高砂市の加古川河口三角洲地帯に存在した島）は約一二キロメートルも離れていること、歌われているのは印南別嬪でなく、「淡路島松帆の浦」の「海人娘子」であることを理由に、この歌がイナミツマ伝説を下地にしているとは認めがたいとされ、当該歌は国土讚美的な歌ではなく、淡路島の地名に因んで対岸の「海人娘子」との思うにまかせぬ恋の煩悶を歌ってみせ、従駕の人々の期待にこたえた³⁾と説かれた。

氏はその後、金村は公務にある現実から離れ、仮構された娘子との恋の世界に身を置いたと解され、第二反歌は国土讚美を目的としたものではなく、対岸の娘子との恋の夢想から覚めて、現実の風景

へと引き戻させる契機としており、行幸先の自然を讚美しつつ、恋の夢想を終結させたところに、行幸先での座興らしい配慮を認められた。

ここで気になるのが当該歌の題詞の表現で、金村の從駕長歌の場合を見ると、

養老七年癸亥夏五月に、吉野離宮に幸す時に、笠朝臣金村が作る歌一首并せて短歌（6九〇七〜一二）

神亀元年甲子冬十月に、紀伊国に幸す時に、從駕の人に贈らむ為に、娘子に詠へらえて作る歌一首并せて短歌（3五四三〜五）

笠朝臣金村

（神亀）二年乙丑春三月に、三香原離宮に幸す時に、娘子を得て作る歌一首并せて短歌（3五四六〜八）

笠朝臣金村

神亀二年乙丑夏五月に、吉野離宮に幸す時に、笠朝臣金村が作る歌一首并せて短歌（6九二〇〜二）

（神亀二年）冬十月に、難波宮に幸す時に、笠朝臣金村が作る歌一首并せて短歌（6九二八〜三〇）

（神亀）五年戊辰に、難波宮に幸す時に作る歌（6九五〇〜三）

右は、笠朝臣金村が歌の中に出づ。或いは「車持朝臣千年が作」といふ。

等のように、金村の從駕歌の題詞には①年月・場所・作者（歌中の場合は左注に）を記すものは雑歌部に収められ、②年月・場所・事情・作者を記し、「娘子」とのかかわりで私情を表現した二作のみは相聞部に収められている。当該の金村歌の題詞は①の從駕儀礼歌の場合に該当する。同じ題詞下にある赤人長歌（6九三八）が從駕儀

礼歌にふさわしい表現であることも参考になろう。この面から見ても金村歌の表現は異色ということになるが、その点をどう解すべきかも問題となろう。

三 行幸の性格

金村歌の表現の特色を考えるにあたり、この行幸の性格にも触れておく必要がある。

山陽道の播磨国は畿内と中国・西国を結ぶ位置にあつて大和政権への服属も早く、東南部の印南は陸海路の要衝として知られ、「印南」の名を詠み込んだ万葉歌も少なくない。今回の印南野行幸の目的について、梶川信行氏は邑美頓宮の営まれた邑美郷一帯がかつては住吉大社の神領で、住吉大神の子神の名次神を祭祀することにあつたと推定された⁷。この行幸の帰途難波宮で藤原宇合が知造難波宮事に任命されているので、難波宮西方の畿外の代表として印南野で住吉大社系の祭祀を営み、難波宮造宮の成就および対外関係における国家鎮護を祈願したと見てよいであろう。聖武天皇が難波宮を重視するのは曾祖父天武天皇が難波宮を副都とした意志を繼承して大陸諸国との関係に備えるためで、今回の印南野と難波宮行幸は天武天皇直系の王權継承者であることを自負し宣揚する行事の一環であつたことはいうまでもないだろう。

この行幸に関する統紀の記事はかなり具体的で、文人一二〇人が玉璫の詩賦を献上した九月二七日に、印南野行幸にむけて正四位上六人部王・藤原朝臣麻呂等以下二七人が装束司に、從四位下門部王

以下一人が造頓宮司に任命され、一〇月七日に行幸したが、『日本紀略』によつて一〇日に印南野邑美頓宮に到着したことが知られる。一九日に帰途難波宮に至り、二六日に式部卿從三位藤原宇合が知造難波宮事に任命されて、二九日に還都したことが記されている。

一連の記事の中で注目される一つは、金村歌の題詞に行幸の日付が九月一日とあつて統紀の記事と異なるが、内裡に玉璫が生じたのを慶事として玉璫詩賦献上当日に装束司・造頓宮司が任命されていることで、これらは行幸の周辺の動向ではあるが、行幸の性格と從駕歌の特色を考える上で参考になると思われる。

延喜式治部省の祥瑞の中に「玉璫」は見当たらないが、東野治之氏はこの祥瑞リストから逸脱するものが正史に少なからず祥瑞に准ずるとして挙げられていることを指摘されており、祥瑞を尊ぶ当時、内裡に仙薬となる玉璫が生じたことは慶事であつたはずで、詩賦献上の勅命を下すにあたり内定の印南野行幸に触れられることがあつても不思議ではない。献上の詩賦に対する褒賞と同じ日に、装束司・造頓宮司を公表するという手際よさがそれを保証していよう。金村歌の題詞の日付をこの流れの中で考えてよいのではないか。この辺の事情を推測させるのが藤原宇合の「璫賦」（『経国集』所収）である。

一天之下、八極の中、園池綿邈、林麓丰茸。奇木名を殊にして萬品なり、神草區を分かちて千叢なり。特にあるは西母が玉璫、麗しきは成王が圭桐。何則ち、深居をトへて紫禁に榮え、盤根を移して彤庭に茂し。地養の淳渥を漬ひ、天生の異靈を禀く。

金闕に依りて彩を播し、玉管に随ひて形を流く。本枝を百卉に固くし、聲響を千齡に植うればなり。爾其、秋實丹心を抱きて色を泛かべ、春花素質を含みて馨を飛ばす。朝に周南漢露を承け、夕に許月陳星を犯す。晩節に當りて愈美しく、涼風を帯びて零つることなし。石虎瞻て角に類へ、李老飮びて瓶に比ふ。海に投げては繆公が遠慮を傳へ、篋に在りては方朔が幽襟を開く。雞心名を洛浦に釣り、牛頭稱を華林に味ふ。斯れ誠に皇恩廣く草木に被り、聖化實に豚魚に及ぶ。何ぞ必ずしも秦松を封賞に授け、周桑を經書に載せむ。⁽⁹⁾（訓読は小島憲之氏による）

賦の内容は勅命に応えたものとしてふさわしい。賦の主意は、西王母の仙薬玉璫が内裡に生じたのは宮廷が俗世を超越した聖所であるからで、地の滋養と天の靈氣を得た玉璫の姿は皇統の榮華と榮誉を千年に伝えるものであること、事実として皇恩・聖化は国の隅々まで行き渡っていること等を述べて聖武王權を讚美することにある。特に皇恩・聖化の治済の理念は行幸に結びつくのであり、畿外の印南野への行幸が念頭にあつての表現であらう。作者の藤原宇合は今回の行幸で知造難波宮事に任命されるその人なのである。

行幸に関する仁藤敦史氏の以下の指摘は重要である。⁽¹⁰⁾

天皇が行軍の形態をとった「律令制度の行列」の中心に位置することで、「統治權の総覽者」としての地位を見る者に確認させ、圧倒するとともに、曲赦・叙位・免課役・賑給与・交易・宣命などの行為により、民衆と直接対峙し、天皇の恩恵・聖徳を感じさせ、王としての支配の正統性を主張する場であり、王權の超越的性格を示す都城とは相互補完的な関係にあった。

と。氏は行幸が民に徳沢を与える慶幸であるという儒教的思想が導入され、制度的に高度に整備されつつあったのが神亀・天平初であることを明かにされた。

詩賦献上の下令の日は金村歌の題詞における行幸の日付を示唆し、勅命に応えた宇合の棗賦は金村・赤人らの従駕歌献上の誘導となったと考えられるであろう。今回の行幸は出発に先駆けて文雅に彩られていることに注目したい。

また、今回の行幸に六人部王を筆頭とする装束司と門部王を筆頭とする造頼宮司が任命されているが、造頼宮司（造行宮司）の前例は元正天皇の養老元年（七一七）年二月の難波宮・和泉宮行幸の折に見られるが、装束司は初見のようである。装束司の任命は行幸の制度的整備の一つといえるが、この点についても仁藤氏の重要な指摘がある。

おそらく、天平期における聖武天皇の頻繁な行幸に際しては、内匠寮が必要とされた多量の供御物を装束司に対して供給したと推定される。天皇行幸を物質的・可視的に荘厳化する供御物・装束の規格化・安定的供給に果たした当官司の意義はたいへん大きかったと考えられ、それ以前の行幸装束と比較するならば面目を一新したと思われる。

仁藤氏のいわれるように行軍の形態をとった行幸は、さらに装束によって王権が荘厳化される。装束は天皇権力の超越的価値にとまなう威厳を視覚的に装飾演出するもので、宮廷の政治的・倫理的・芸術的理念にもとづく総合文化的表現であり、その壮麗華美な宮廷風つまり「風流（みやび）」を示威し鄙にもたらしことであつた。

その重要な役割を中心的にはたした六人部王はまた風流侍従の筆頭者でもあつた（『家伝』¹²）が、既に「太上天皇、難波の宮行幸の時歌」（一六六〇九）でも指導的役割を果たしていたことを忘れるわけにいかない。往時の難波宮行幸を直接讃美する儀礼歌ではなく、宴において関連的に歌われたものであるが、旅にともなう国讃め（土地讃美）と国しのひ（家郷思慕）の間で揺れつつ国しのひに傾く心を表現上に演じつつ土地の娘子の対応を求める趣向の歌群の中で、六人部王は都人の「国しのひ」に傾く一首目（置始東人）、「国讃め」に傾く二首目（高安大島）の歌を受けて「国しのひ」の心を強調して清江娘子の歌を引き出す中心的な役割をはたしている。行幸地にもたらされた宮廷風の間における鄙の娘子との相聞的情緒を帯びた歌の交流は「みやび」なわざであつた。

六人部王と金村とのかかわりは、早く志貴親王の薨時と推定されるのであるが、今回六人部王が中心となつて、行幸を装飾的にも王権の「みやび」を強めた行幸に供奉した金村等は、行幸に先んずる宇合の文雅にも誘導され、従駕歌においても「みやび」の趣向に応えようとしたと想像される。

四 イナミツマ伝説

先の諸説の中で触れたが、梶川氏が村田氏説について指摘した点は重要であろう。金村がイナミツマの地に臨み、その伝説をとりあげて作歌したのであればともかく、場所的になずれ（作歌の場所の隔離）と内容的になずれ（天皇の聖婚ではなく「ますらを」の恋慕）は

やはり気になるところである。しかし、村田氏の「隠妻（ナビツマ）伝説を下地にしている」という指摘も全く誤っているとは思えない。

「印南」の地に関しては、斉明天皇七年（六六一）の征西途中、中大兄皇子が「三山の歌」（一四〇六）で「印南国原」の伝説に関連して感慨を歌ったことは有名であり、その他金村以前の作者に、「稲日野」（三二五三）「稲見の海」（三〇三）を歌った柿本人麻呂や、「稲日都麻」（四五〇九）を歌った丹比笠麻呂があり、印南の地名や伝説が知られていたことは明らかである。金村の時代は現地に行かなくとも印南の伝説を知りえたはずで、播磨国風土記（靈龜元年以前に成立）に記載されている景行天皇のイナミツマ伝説は宮廷官人社会ではかなり知られていたであろう。印南野行幸が日程に上ると行幸地に関する知識は得られたであろうから、イナミツマ伝説は天皇の遺業と印南の分ち難い伝説として金村の予備知識もあつたろう。印南野行幸に供奉して献歌の機会があればこの伝説をもとに作歌することを心組みしていたとしても不思議はないと思われる。

古事記によれば、景行天皇は吉備臣等の祖若建吉備津日子の娘、名は針間の伊那毘能大郎女を娶つて、櫛角別王・大碓命・小碓命（亦の名倭男具那命）・倭根子命・神櫛王の五子を生んだと伝える。さらに伊那毘能大郎女の妹、伊那毘能若郎女も娶つて、真若王・日子人之大兄王を生んだと伝える。また日本書紀には、景行天皇は即位の翌年播磨稲日大郎姫（に稲日稚郎姫を立てて皇后とし、大碓命・小碓命の二子（一書に稚倭根子皇子を加えた三子とする）を生んだと伝える。その他、妃の一人五十河媛の生んだ二子の兄神櫛皇子は讃岐国造の始祖、弟稲瀬入彦皇子は播磨別の始祖と伝える。

この記紀に景行天皇の播磨行幸記事はないが、針間伊那毘能大郎女（播磨稲日大郎姫）を娶つたという共通の伝えをもつ上、記は伊那毘能大郎女の妹伊那毘能若郎女も娶つたと伝え、紀は五十河媛の生んだ稲瀬入彦皇子が播磨別の始祖となつたと伝え、風土記は賀毛郡の山直等の始祖である息長命を媒として景行天皇が印南別嬭と結婚したと伝える。

風土記における景行天皇の伝説はすべて印南別嬭求婚に関するもので、長野一雄氏は息長命を介して播磨との関係が結ばれていることに注目し、景行天皇の伝承はまったく机上の創作と言いがたく、この説話は播磨の土豪か、息長命なる人物の血縁者が保持していたものを編者が記しとどめたと推定されている。記紀によると、景行天皇の「国寛ぎ」は具体的には小碓命（倭男具那命）すなわち倭建命の活躍によつて大八島国を平定すると語られるが、風土記では天皇の「妻寛ぎ」のかたちで説話化されたと考えられるであろう。

阪下圭八氏は風土記の景行天皇のイナミツマ伝説の本質について、古代王者の儀礼の一環たる聖婚にもとづく説話にとらえ、妻を求めて訪れる大帯日子（そのまま天津日子にあたる）と、印南の土地そのものを体現する印南別嬭との取り合わせは、記紀の天皇記にみられる天子による地方土豪の女への妻問いの説話の型を踏んでおり、

国見と聖婚はひとつづきの祭式過程とみるべきで、（略）国見において郷土に祝福のこたばをなげかけた首長が、そのあとみずから自然に多座を感ぜしめようとして実修した魔術が、聖婚の原義であつたはずだ。したがって、天子の「国寛ぎ」はその

まま「妻求ぎ」へと接続してゆくのである。

と説かれた⁽¹⁴⁾。また、森朝男氏は金村の当該歌について、

天皇の行幸は原理的には国覓ぎであるから妻覓ぎがあつて当然である。万葉集の段階の天皇国覓ぎに当たるものは行幸である。

これに供奉する宮廷歌人には、天皇の国覓ぎに倣つた叙景の歌や妻覓ぎに倣つた土地の娘子への恋歌が歌われる。それらはいわば宮廷歌人の行幸儀礼歌の様式なのである。

と述べられた⁽¹⁵⁾。ともに金村の当該歌の本質にかかわる指摘をされており、両氏の指摘の線上に当該歌は理解されるべきであろう。

五 海人娘子とますらを

ここで金村が当該歌に「イナミツマ伝説」の天皇と土地の娘子ではなく、「海人娘子」と「ますらを」を登場させた意味を考えたい。

山部赤人は前年の難波宮従駕歌（6九三三〜四）でも今回の従駕歌でも、御食つ国の贊の供御に奉仕する「海人」の姿を景として天皇讚美を表現する。「海人」について奥村美恵子氏が、人間にとって異界の海という非日常的空間で日常的に生活する彼らの存在の特殊性を詳説して参考になるが、金村は前年の難波宮従駕歌の第二反歌で、

海人娘子棚なし小舟漕ぎ出らし旅の宿りに楫の音聞こゆ

（6九三〇）

と「海人娘子」に絞つて歌っており、当該歌では天皇讚美の景として「ますらお」とかわらせて「海人娘子」を導入したばかりでない

く主題に据えたわけであるが、「妻覓ぎ」の対象は土地の「娘子」でもよいはずであろう。にもかかわらず「海人娘子」を対象としたのは、既に述べたような行幸における国見の範囲に関連するものであるが、それにとどまらぬ理由もあつたのではないかと思われる。

娘子らが麻笥に垂れたる続麻なす長門の浦に朝なぎに満ち来る潮の夕なぎに寄せ来る波のその潮のいやますますにその波のいやしくしくに我妹子に恋ひつつ来れば阿胡の海の荒磯の上に浜葉摘む海人娘子らがうなげる領巾も照るがに手に巻ける玉もゆららに白櫂の袖振る見えつ相思ふらしも（13三二四三）

右の歌中の海人娘子が白衣に呪具の「領巾」と「玉」を装うという特別の装束であることについて中西進氏は「袖に玉をつけた服装は通常の女子の服装と異なる。袖を振つて、海神への招魂儀礼の実修中」であると推定された⁽¹⁶⁾。海人娘子は呪力によつて海神と交感する海神に近い存在、人間と海神との媒となる境界の存在であることを示すものであろう。このような海人娘子が虚構の求愛を契機に官人社会の「風流」の歌の場に姿をあらわし、その極点をなすのが「松浦川に遊ぶ序」で、当該歌より成立は遅れるが金村と同時代の大伴旅人の作である。旅人から梅花の歌群と松浦川の歌群を贈られた都の吉田宜は「松浦の仙媛の歌に和ふる一首」で

君を待つ松浦の浦の娘子らは常世の国の海人娘子かも

（5八六五）

と旅人の作意を理解し、旅人が作中で「風流」の化身に描き、「神仙」の素性を語らせている娘子らを「常世の国の海人娘子」ととらえて

いる。既に指摘されているように、中国文学の神女との邂逅を主題とする高唐賦・洛神賦・神女賦・遊仙窟等を潜在文獻に神仙境として描き出された松浦玉潭に神仙の娘と逢会する共同の幻想を描き、高尚な風流の世界に心を遊ばせたものであつた。吉田宣が「常世の国の海人娘子」と言つたのはその海人娘子の背景に海神とのかわりを見ていたからであらう。当該歌の作者金村も

……ますらをの 手結が浦に 海人娘子 塩焼く煙 草枕 旅
にしあれば ひとりして 見る験なみ 海神の 手に巻かした
る(序) 玉だすき(枕) 懸けて偲ひつ 大和島根を

(336六)

と「ますらを」に對置された「海人娘子」の縁で「海神の 手に巻かしたる(序) 玉」と表現を展開しているのは、金村もまた海人娘子の背景に異界、海神のうしはく神話的世界を見ていたからであらう。このような海人娘子の背景に皇統神話があつたことをここで想起すべきではないだろうか。

古事記によると、筑紫の日向の高千穂の靈峰に天降つた天孫天津日高日子番能迹彦命は笠沙の岬で出会つた大山津見神の女の神阿多都比売(木花之佐久夜毘売)と一宿婚をして、火照命(隼人の阿多君の祖)・火須勢理命・火遠理命(天津日高日子穗玉手見命)の三子を得る。末子の火遠理命(山幸)は兄の火照命(海幸)と交換した鉤を失うが、その鉤を求めて綿津見神の宮に至り、神の女の豊玉毘売と結ばれて(三年後に鉤の呪言、水を支配する塩盈珠・塩乾珠の呪具を与えられて戻り、兄火照命を服属させる)、天津日高日子波(限建鵜草葺不合命)が生まれる。この命がさらに叔母(豊玉毘売の妹)

玉依毘売と結ばれて生まれた五瀬命・稻水命・御毛沼命・若御毛沼命(亦名豊御毛沼命)の末子若御毛沼命の別名が神倭伊波礼毘古命で、初代の天皇神武と伝えられる。

「この神話は天つ神の子孫が山神の娘・海神の娘と結婚して呪能を受けることによりこの世界を支配する力を得たとするものである」と神野志隆光氏が説かれるとおりであらうが、ここに金村の当該歌で「ますらを」の恋慕の対象に特に海人娘子を選んだ理由が考えられないであらうか。この「海人娘子」との恋の基層に天皇の祖神が海神の女(豊玉毘売)と結婚することによって呪能を得て世界を服属させたという皇統に関する神話は金村にとつても既知の事柄であつたに相違なく、金村はその認識に立つて、「イナミツマ伝説」における天皇の「娘子」への「妻覓ぎ」に対して、当該歌においては「ますらを」の「海人娘子」への「妻覓ぎ」へと展開させたといふことが可能であらう。

そうとして、「海人娘子」に恋慕するのが天皇でなく「ますらを」としたのは何故か。当該歌の中の「我」の表現は清水氏の指摘にもあつたように、全くの金村個人をさすとは考えがたいのであり、やはり「ますらを」の表現上の性格に意味を求めるべきであらう。

万葉歌においては、宮門警護・行幸供奉・狩獵等の姿、地方赴任における官人意識、族名の高揚等に雄々しい「ますらを」が表現され、金村にも

梓弓 手に取り持ちて ますらをの さつ矢手挟み 立ち向ふ
高円山に……(2二三〇)

ますらをの弓末振り起し射つる矢を後見む人は語り継ぐがね

(3 三六四)

など律令官人としての「ますらを」を描く表現がある。その一方で、当該歌のように「たわや女」の如き「ますらを」をも表現している。毅然とした律令官人意識を示す「ますらを」の男性像と、その「ますらを」意識を否定するような女性への恋慕に傾倒する男性像は「ますらを」に内在する矛盾であるが、恋歌に「ますらを」意識にかかわる表現例が多い。当該歌の「ますらをの 心はなしに」の表現の類例をあげると、次のとおりである。

ますらをの心はなしに秋萩の恋のみにやもなづみてありなむ

(10 二二二)

ますらをの現し心も我はなし夜昼といはず恋ひしわたれば

(11 三三七六)

菅の根のねもころ妹に恋ふるにしますらを心思ほえぬかも

(11 二七五八)

天地を少し至らぬますらをと思ひし我や雄心もなき

(12 二八七五)

ますらをの聡き心も今はなし恋の奴に我は死ぬべし

(12 二九〇七)

これらの歌には、恋のために「ますらを」の意識・理性・誇りを忘れてしまうことに内省をともなう嘆きが表現されているが、男女の情愛に傾倒し恋に嘆く「ますらを」こそが石川郎女の歌

風流士と我は聞けるを宿貸さず我を帰せりおその風流士

(2 二一六)

で求められる「みやびを」であろう。

この「ますらを」に内在する矛盾を歌の表現の問題としてとらえた飯田勇氏は、「ますらを」とは男同士の関係による「官人」としての理想像であり、女との関係にあつては必ずしも理想的な男性像ではない。他方の男・女の恋の関係における理想的な男性像が「みやびを」であり、それこそが宮廷の理想的な男性像を示す言葉であつたと指摘される⁽¹⁹⁾。

金村は当該歌に「ますらを」意識を喪失して「海人娘子」に恋慕焦心する「ますらを」を登場させているが、それが「みやびを」にほかならない。そしてそのことによつて歌に「みやび」の世界を導き入れ、「妻覚ぎ」の心情を吐露させている。まるでイナミツマ伝説における天皇の土地の娘子に対する「妻覚ぎ」をほうふつとさせるようにである。そこに金村の狙いがあつたのではないか。

六 金村の表現手法

いうまでもないことだが、当該歌の表現はイナミツマ伝説の天皇の「妻覚ぎ」そのものの再現ではない。伝説をなぞるように、「みやびを」に身をやつした「ますらを」が「海人娘子」への恋慕に焦心する姿を表現したのである。この表現を構想するにあたって必ずや金村の念頭にあつたものは、状況的に相似性をもつ「イナミツマ伝説」型の天皇の「妻覚ぎ」の歌である古典的な雄略天皇御製歌であらう。

籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この岡に 菜摘ま
す子 家告らせ 名告らさね そらみつ 大和の国は おしな

べて 我こそ居れ しきなべて 我こそ居れ 我こそば 告ら
め 家をも名をも (11)

この歌は天皇が菜摘みの娘子に求婚するが応諾が得られずに、大和の国の王者としての権威を誇示しつつ「我」から「家・名」を告ろうとするところで表現は結ばれ、歌中で結婚は達成されていない。雄略御製歌が「イナビツマ伝説」と類型的な婚姻失敗譚にもかかわらず万葉集冒頭にかかげられていることの意義について説かれる高松寿夫氏の論は説得力をもつが、雄略天皇の万葉御製歌・古事記金鉏岡歌謡(記九九)はともに天皇が求婚を拒否されることによって一層意欲を高める表現(そのことが結婚成立を予想させる)であることに注目したい。

金村の当該歌は、天皇ではなく、王権に奉仕して天皇の意志の代行者たりうる「ますらを」が「海人娘子」に恋慕し、逢う手段(船楫)が得られないために(娘子の拒否でないところに配慮が働いている)「一層憧憬焦心し逡巡する」と表現される。ここに「天皇」から「ますらお」「みやびを」へのずらし、「子」から「海人娘子」へのずらしを見とることができる。このような「ずらし」を用いながら、本旨の「妻覓ぎ」を繰り返すのは「もどき」であろう。²⁰古典的な儀礼歌における天皇の「妻覓ぎ」の意義が「ますらを」による「妻覓ぎ」として翻案され複演出されるという技法であり、「もどき」により「国覓ぎ」の本義が説明され繰り返されることによつて、「国覓ぎ」の効果や意義が一層期待され確認されるのであり、そこに行幸従駕歌としての意義が認められるのである。

金村が「もどき」と見うる技法を用いたのは「みやび」のあり方

にもとづくであろう。天平八年(七三六)と時代は下るが、葛井広成の家に歌儺所の諸王・臣子等が集い、「古情を尽して、古歌を唱ふ」ことが称揚され、「古体に和へ」うる人を「風流意気の士」といつていることが見える。呉哲男氏が「古」とは端的に「典拠」という意味である。典拠のあるものが「風流」だという認識である。²¹といわれるように、「典拠を受け伝える」のも風流であり、歌の世界ではそれが「みやび」のあり方でもあった。金村は古典的な儀礼歌の「もどき」として「ますらを」を登場させ、「海人娘子」に対する恋慕憧憬を表現した。古典的な儀礼歌を典拠に新しい趣向の儀礼歌へと再生させることが「風流(みやび)」にふさわしいのであった。

雄略天皇御製歌は聖婚を主題とし、舒明天皇御製歌の国見歌(一二)や舒明天皇の皇女中皇命の遊獵歌(一三・四)とともに古典的な儀礼歌であり、それを典拠とした金村の歌も新風の儀礼歌となりえたであろう。金村は、天皇の「国覓ぎ」は「妻覓ぎ」であるというモチーフを「ますらを」の「海人娘子」への恋慕憧憬へと変容させ、「イナミツマ伝説」の伝えられた印南野の行幸ならではの新風の儀礼歌として提供し、儀礼歌献上の場の期待に応えたのであった。

金村の当該歌が長短歌三首全体として「みやび」であると同時に儀礼的な讚美の機能をはたしたなのは、雄略天皇御製歌の天皇の「妻覓ぎ」を意味する「聖婚」と舒明天皇御製歌の天皇の「国覓ぎ」を意味する「国見」の統合的表現たりえたからであると考えたい。

金村の行幸従駕歌には儀礼歌である雑歌の流れと、相聞歌の流れとを考えることができる。当該歌はその「みやび」的な性格のために相聞性が強く印象づけられるが、やはり従駕儀礼歌として雑歌部

に収められているのを妥当とすべきであろう。

金村の当該歌に関して池田三枝子氏は「何故行幸従駕という公的な場に於いてまで、相聞的・享樂的であらねばならないのか」と問いかけられ、聖武朝において聖天子の徳の影響により余沢が治くゆきわたった「徳沢流治」の具現が強く要請されていた中で、「徳沢流治」という思想的装いをもつ天皇・行幸の場で詠まれた当該歌における「土地の娘子との恋愛は『徳沢流治』の具現たり得、行幸従駕歌として機能した」と考えられ、そこに「みやび」の実現を見られた。その主意に賛同しつつ、小稿は私なりに金村の表現に即して当該歌における趣向の意義を考えてみたのである。

注

- (1) 吉井巖氏『萬葉集全注 卷第六』昭和五九年
- (2) 梶川信行氏「対岸の娘子——印南野従駕歌」『笠金村と山部赤人』(『萬葉史の論 笠金村』昭和六二年)
- (3) 清水克彦氏「笠金村論」(『萬葉論集 第二』昭和五五年。初出『万葉』七八号、昭和四七年二月)
- (4) 村田正博氏「印南行幸時の歌」(『万葉集を学ぶ 第四集』昭和五三年)
- (5) 梶川信行氏(2)に同じ
- (6) 梶川信行氏「金村の神亀三年印南野行幸歌」(『セミナー万葉の歌人と作品 第六卷』平成二年)
- (7) 梶川信行氏「コトバから文字へ——印南野従駕歌の論」(『万

- 葉史の論 山部赤人』平成九年)
- (8) 東野治之氏「飛鳥奈良朝の祥瑞災異思想」(『日本歴史』二五九号、昭和四四年一二月)
- (9) 小島憲之氏「上代に於ける詩文学」(『上代日本文学与中国文学 下』昭和四三年)
- (10) 仁藤敦史氏「ミユキから行幸へ」(『古代王権と官僚制』平成一二年)
- (11) 仁藤敦史氏「古代王権と行幸」(『古代王権と官僚制』平成一二年)
- (12) 『家伝』の風流侍従の中に門部王の名も見えるが、造頼宮司の筆頭者門部王はこの時従四位下で、二年後の神亀五年に正五位上から従四位下に昇叙した風流侍従の門部王とは別人である。
- (13) 長野一雄氏「播磨風土記の天皇説話」(『古代説話の文学的研究』昭和六一年)
- (14) 阪下圭八氏「イナビヅマ——播磨風土記の聖婚説話——」『文学』(昭和四六年一月)
- (15) 森朝男氏「比喩としてのへをとめ」(『恋と禁忌の古代文芸史——日本文芸における美の起源——』平成一四年)
- (16) 奥村美恵子氏「万葉集における『海人』について」(『古代文学』二八号、平成元年三月)
- (17) 中西進氏「万葉集 全訳注原文付」(昭和五五年)
- (18) 神野志隆光氏「古事記」(新編日本古典文学全集、平成九年)
- (19) 飯田勇氏「男・女関係としての官廷と文学——『万葉集』の

「ますらを」「みやびを」を視座として——」（『古代文学』三八号、平成十一年三月）

(20)

高松寿夫氏「『万葉集』冒頭「雄略御製歌」の背景と性格」（『日本古代文学と東アジア』平成十六年三月）

(21)

折口信夫氏「もどき」（『折口信夫全集 ノート編第五卷』昭和四十六年）。石井一躬氏「もどき論序説」（『日本民俗研究大系第六卷 芸能伝承』昭和六十一年）

(22)

呉哲男氏「万葉『風流』考」（『古代日本文学の制度論的研究——王権・文字・性——』平成十五年）

(23)

池田三枝子氏「聖武朝の政治理念と『みやび』」（『古代文学』三四号、平成七年三月）

（むらやま いずる・小樽商科大学名誉教授）